



タイトル Title	ルスワ(luswa) : ウガンダ東部パドラにおけるインセスト・タブー(Luswa : The Notion of the 'Incest Taboo' among the Jopadhola of Eastern Uganda)
著者 Author(s)	梅屋, 潔
掲載誌・巻号・ページ Citation	国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 49:1*-22*
刊行日 Issue date	2017-12
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81010037
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81010037

ルスワ (*luswa*)

ウガンダ東部パドラにおける インセスト・タブー

梅 屋 潔

(協力：マイケル・オロカ＝オボとポール・オウォラ)

I はじめに

私はこれまで、現地調査に基づいて、ウガンダ東部に主に居住するアドラ (Jopadhola) という民族の「世界観」ないし「存在論」において顕著な特徴をなすと考えられる「災因論」を分析するための資料を提示してきた [梅屋 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2014a, 2016a, 2017a, 2017b]。また、その問題と密接にかかわる問題系として、葬送儀礼の次第にも着目し、資料を提示しつつ分析を進めてきた [梅屋 2014a, 2015, 2017c]。

現地調査の具体的な進め方は、トロロ県のグワラグワラという村を調査基地とし、全準郡にわたってこの種のトピックに詳しい話者を訪ねてインタビューを行うというものであった (このプロセスについては梅屋 [2002, 2011] に詳しい)。いわゆるスノーボール方式の調査で、話者に紹介を依頼し、それを積み重ねていくやり方である。話者となったのは、ほとんどは地域の長老であり、男性であったという事実は指摘しておくべきだろう。地域的にはほぼパドラ全土をカバーしたが、このトピックについてある程度詳しく語ってくれる話者が多いとはいえないので、得られた資料が当該の社会全体を代表しているわけではない。

フォーマル・インタビューは録音し、現地語で書きおこし、英訳し、「テキスト」⁽¹⁾とした。テキスト作成の際にわからない場所については、マイケル・オロカ・オボと、ポール・オウォラに尋ねながら解釈を検討し、それでもわからない場合には再調査をする方法をとった。その手法や進め方の実態については梅屋 [2014b]、Oloka-Obbo [2016]、Owora [2016] に詳しく報告した⁽²⁾。

本稿で中心的に論じるのは、ウガンダ東部パドラ (Padhola、「アドラの土地」の意) において共有される、ルスワ (*luswa*) という概念である。本稿ではその概

念を中心としたテキストを提示し、分析することにする。ルスワの概念は、現地
の英語話者の間では、しばしばインセスト・タブー (incest taboo) と訳されるこ
とがあるが、それは正確とはいえない。

実際には、この概念がカバーする範囲は、狭義のインセスト・タブーに限定さ
れない。狭義のインセスト・タブーである、ニョウォモ・ワト (*nywomo wat*) に
より発生する現象を含む、ある程度の幅を持った関連する数多くのタブー侵犯に
よって引き起こされるあらゆる不幸を招く可能性のある状態を指している。

言語系統を同じくする西ナイル系の近隣民族の民族誌のなかからは、ルスワに
類似する語根を共有する、類似した意味内容の概念を今のところ発見していない
ので、アドラで独自に発展した概念である可能性が高い。歴史上クランに多くの
外部者を取り込んできたと推測されるアドラの形成のプロセスの過程で整備され
た観念なのかもしれない。Crazzolara [1951] など既存の信頼できる口頭伝承の
記録にもこの概念はあらわれていない。

ルスワに関する問題は現在でもクラン単位の裁判の案件になることが多い。そ
の分野の専門家であるバーミンガム大学のモリーン・マップ・オウォリ (Maureen
Mapp Owor) [Owor 2012: 239-241] がアドラのクラン・コートとの関係で若干の
言及をしているのがほとんど唯一の先行研究であろう。

…ニョウォモ・ワト (*nywomo wat*) [は、犯罪と比較しうるタブー侵犯の：梅屋]
ひとつの例である。クランの構成員同士は、血縁関係として近いと認識され
る。ニョウォモ・ワトは、ルスワ (*lusiwa*) という究極の不幸をもたらすと信じ
られている。それは、タブーを犯した本人とその家族、そしてクラン全体にも
及ぶ。このような違反に対しては非常に大きな賠償が命令される。このタブー
は、神秘的な信念にもとづいており、このルスワによって苦しめられている者
はチョウィロキ (*chowiroki*) という儀礼的な浄めによってのみ、その邪悪さを
除去できるとされている。儀礼的な浄めを必要とする社会規範の違反として
は、他に、イエティ・マニヤ・オリ (*yeti manya ori*) という姻族への侮辱、そし
てラミ (*lami*) とよばれる言葉による「呪詛」がある。… [Owor 2012: 239-241]

II テキスト

1 ふたつの「ルスワ」

<テキスト1>

Q1 : ルスワ (*luswa*) とは何ですか?

A1 : ニョウオモ・ワト (*nyowomo wat*) の結果として起こるさまざまな凶事のことだ。普通の正気の間人には、そんなことはできないはずだ(①)。その禁忌の対象は母方、父方双方のオバとオジ、母親と父親はもちろん、姉妹や兄弟をふくむ(②)。ルスワにはふたつの種類がある。ルスワという言葉自体は、それだけでは、近親者—例えば父と娘のような—が性交した結果起こる一連の病気のことを指す(③)。もうひとつは、たとえば親などの見てはならない裸を見ること、その結果起こるルスワがある(④)。こんな例を知っている。ある男がトイレの穴を掘っていてその穴から土を運びだすのに息子の妻の手を借りようとした。穴から見たら、義理の娘である息子の妻の性器が下からぼっちり見えてしまったそう(⑤)。これは事故だったが、男にはみるみるルスワの効き目があらわれて、皮膚の表面がぼりぼりはがれ、色に変色していったと聞いている(⑥)。これ以外にも義理の娘が水浴びしているところが目に入ってしまったとか(⑦)、そういった事故はいくつかあるようだ。…⁽³⁾

2 自身の体験から

…私自身にも思い当たる事件がある。あるとき母親と喧嘩になり、怒った母親が私の前で衣類を脱ぎ捨てて白昼裸になったことがある(⑧)。これはむしろ「呪詛」に近いね(⑨)。

Q2 : 一説によると、親やオジオバが服を脱いだら、自分も脱いでしまったらルスワにならないともいいますが?(⑩)

A2 : 私はそのときはそんなことは考えつかなかった。いや、いまお前が言った、自分も服を脱げばルスワにならないという考え方は知らなかったのだ(⑪)。今はじめて聞いた(⑫)。なにしろ、その時には怒っていた母親が何より恐ろし

かったしね。結局のところ、私は本当に長い間このルスワには悩まされた。私には7人子供が生まれたが、すべて死んでしまった(13)。私は何人ものジャシエシ(占い師)に相談した。そうした時には母と口を利くのをやめて、食べ物だけを無言で分け合うようにすればよかったのだそうだ(14)。そうすれば母親のほうが悪く死んでしまい、子供たちはすべて助かっただろうに、というのだが、みんな死んでしまった後では、後の祭りだった。…

3 ベッドを使うと「ルスワ」に

…それに加えて、尊敬すべき立場の人たち、つまり親やオジ、オバが使っているベッドで寝たり、そこでセックスしたりするとルスワになる、ともいうね(15)。だからそうした人たちのベッドには、普通近づかないものだ。

煙草を盗んだ女の話をしてやろう。元気な女で頻繁に夫の父親の寝室の枕元にやってくる女だった。彼女の目当ては煙草だけだった。そのころこのあたりで煙草は一般的ではなかった。彼女が煙草を吸うと、たちまち彼女の顔は、お前の今着ている赤いシャツのように顔が真っ赤になった。義理の父親の枕元から盗んだものだったわけだ(16)。彼女はたぶん、儀礼的に「燃やされた」のだと思うが(17)、よく覚えていない。現在も元気で生きているし、煙草も吸っているようだが、その一件以来父親の元には近づかなくなったようだ。父親はもうずいぶん以前になくなったが。

オリ(*or*) (姻族)とは、忌避関係にある。姻族に限らず、忌避関係を守ることは大切なものだ(18)。もし父親の妻を寝取ったりしたらルスワになり、顔色は真っ黄色になって、体もやせさらばえて衰え、死を待つばかりとなるだろう(19)。父親に謝って許してもらえれば、ルスワは祓われることがある(20)。…

【解説】

ニョウォモ・ワトとして性関係が禁じられているのは、父方、母方双方のオバ、オジ、父母、兄弟・姉妹である(2)。これは、たとえば、*sister*に当たるニヤメリ(*nyamer*)は、父方では、FBD、FZD、母系ではMZDもMBZも含むかなり

広い範囲に及ぶ。その下の世代になるとテキストでは想定していないが、ニャル (*nyar*) (娘) となりそれもまた禁忌である。いわば、男性を主体として考えると自分のクランならば無条件で禁忌であり、系譜がたどれるならば、異なったクランでも、インセストとなってしまう可能性がある。これについて、アドラ・ユニオンの constitution は、次のように規定する。

「結婚の禁止

1 4 結婚してはならない次の人間である。注意深く知っておくこと。母、母の娘、息子の娘、姉妹、母の母、娘の娘、妻の母、父、父の息子、息子、父の父、母の父、息子の息子、娘の息子、姉妹の息子、父の兄弟の息子、母の母の息子、兄弟、夫の父、母の夫、妻の娘、父の姉妹、兄弟の姉妹、姉妹の娘、父の兄弟の娘、母の姉妹の娘、息子の妻、夫の息子、父の兄弟、兄弟の息子、娘の夫、クランのメンバー、父の父の息子⁽⁴⁾。

双方の合意があるかどうかにかかわらず、性関係をもってはならず、結婚もしてはならない。」

[Tieng Adhola: n.d. 6]

ルスワという言葉は、一つの用法として、このニョウォモ・ワトを侵犯したために起こると想定される病気を指す (③)。もう一つの用法は、見てはならない近親者の裸形や性器を目撃してしまうことによって起こる (④)。トイレの穴を掘るときに上を通った息子の嫁の性器を目撃してしまったことは、過失ではあるがルスワである (⑤)。すぐに皮膚がひび割れて色が変わっていったとされる (⑥)。たまたま義理の娘の水浴びを目にしてもいけない (⑦)。

このタブーを用いて、年長者が年少者に罰を与えようとすることもある。喧嘩の最中に母親が息子の前で服を脱いで裸になった (⑧)。これはルスワであるが、見てしまった者に被害が及ぶ、「呪詛」に近いものである (⑨)。

Q 2では、一つの説として、両方裸ならばルスワにならないという説の真偽を尋ねているが、「知らなかった」(⑪)「今はじめて聞いた」(⑫)という。結局この母親の「呪詛」に近いルスワのおかげで、7人の子供はすべて死んでしまった(⑬)。

ジャシエシによれば、無言で食べ物をシェアすれば (14)、このルスワは服を脱いだ母親にその環流されるはずだったという。

もうひとつの禁忌は、父母やオジ、オバが使っているベッドで寝たり、その上でセックスするとルスワになるという (15)。そういった人のベッドには、何か結界のようなものがあるのか、あるいは、罨でもあるのか、夫の父親の枕元になれなれしく来る嫁が煙草を吸うと、たちまち顔が真っ赤になって、義理の父親から盗んだものだということがわかったという (16)。儀礼の遂行には「燃やされた」という表現を用いている (17)。忌避関係を守ることは大切で、姻族とは忌避関係にあることは、十分注意すべきである (18)。父親の妻と性関係を持ったりすれば、すぐにやせ衰えて死ぬだろうというが (19)、このテキストでは、ルスワは、許され、和解すれば、助かるものもあると考えるものがあることを示唆する (20)。

4 ヤーシ・ルスワはあるか？

Q 3 : ルスワに対処するヤーシ (*yath*) (薬草) はありますか？

A 3 : 病院に行こうと、伝統的な施術師のところに行こうと、ルスワ自体を根本的になおす薬はない。ルスワの状態になると、人は、力を失い、何もできなくなって、考えることすらできなくなってしまう (1)。そういう意味では、ちょうどラム (「呪詛」) をかけられてしまった場合と症状はそっくりだ (2)。たとえば、ある男がオバとインセストの関係になってしまった場合、その男はきつとそれからの生涯ずっと、同じような年かきの年増女を捜し回るようになる (3)。これがルスワが効いているしるしだ。そいつを「燃やさない」限り、ずっとそれは続くのだ (4)。また、体の調子が悪くなり、AIDS 患者のように体力がなくなり、弱々しくなる。がたがた震えがとまらなくなったりする。髪の毛の色が瞬間に変わり、抜け落ちてすべての髪の毛を失った者もあるという。皮膚の表面がはがれ落ち、肌の色が真っ黄色になって、斑点が出てきて、人によってはアルビノのような肌の色になる。性的能力も、生殖能力もうしなわれる。実際に、ルスワになった者の子供が生まれないし、仮に生まれたとしてもすぐに死んでしまう運命なのだ。それに、ルスワになったら、やがて気が狂っ

てしまうだろう (⑤)。ルスワを祓う薬、ヤーシ・ルスワ (*yath lusuwa*)、ルスワを浄める薬は存在する (⑥)。しかし、それを処方したが最後、その日にでも相手は死んでしまう (⑦)。

私はあるときついに、ルスワを祓うジャヤーシ・ルスワ (*jayath lusuwa*) を探しあてた。「お前に裸を見せた母親はまだ生きているのか」とたずねられたので、「はい」といよいよ答えたのだ。それで、彼は私にやり方を教えてくれて、母を呼びよせた。そして、インセストを犯した者と同じ扱いで私たち二人を裸にして小屋に閉じ込め、火を放ったのだ。ふたりとも命からがら小屋から脱出し、施術師の屋敷に辿りついた (⑧)。

その儀礼がすんでから、私は別の妻と結婚してその妻との間には今や12人の子供がいる。子供たちはすべて健在だ。先の7人の子供を亡くした妻とは別の妻だ (⑨)。しかし、儀礼の直後に、私の母親は突然死んだ (⑩)。ルスワは、病気にかかっているだけではなくて、死とかその他の厄災にも深くかかっていることを実感したものだ (⑪)。

その後、その結果を長老たちとも十分に話し合った結果なのだが、ルスワを祓う薬は存在する、という結論に達した (⑫)。その薬の薬液で水浴びするようにして用い、ルスワを祓い浄めるものだ (⑬)。しかし、長老たちは、同時にその薬は死に至る危険なものだ、という点でも合意したのである (⑭)。…

【解説】

はたしてルスワを祓う薬はあるのだろうか? 「ヤーシ・ルスワ」は存在する (⑥)、と話者は断言する。しかし、それを処方したが最後、相手は死んでしまうという (⑦)。これは、体験に根ざしたものであるとともに、長老たちとの話し合いの結果認定したことでもある (⑫、⑭)。

ルスワになると、何もできなくなり、思考能力を失う (①)。外見上も髪の毛の色が変わり、抜け落ちる。皮膚の表面がはがれ落ち、肌の色が黄色くなり、斑点が出てくる。AIDS患者のように身体的に弱々しくなって性的能力も生殖能力もなくなる。最後は発狂する運命だ (⑤)。これらは、「呪詛」の症状とそっくりだという (②)。オバとインセスト関係を持つと年増女ばかり探し回るといふ、どの

ような侵犯をしたのかを暗示するような特徴的な症状もあるようだ (③)。

7人の子供を失った話者は、ついにルスワを祓うことができる専門家を捜し当てた。そして、ニョウォモ・ワトを犯した場合と同じ、「燃やす」儀礼を受けたのである (⑧)。これは、バナナの葉でつくった小屋に二人を押し込んで火をつけ、オケウォがひっぱたきながら追いはらう儀礼で、その詳細については、次のテキストでもうすこし詳しく見る。

そのおかげで現在では7人の子を失った妻とは別の妻との間に12人の子供がいるという (⑨)。しかし、その儀礼の直後に、母親は急死した (⑩)。ヤーシ・ルスワによって自分のルスワは去ったが、母の命も奪われたと考えている。その後、長老たちとで話し合った結果が、ルスワを祓う薬は効き目があるが (⑫)、それを用いると死人が出るとの結論であった (⑭)。それは、薬液で水浴びするようにして用いる薬だということである (⑬)。

5 「災因」を祓う

Q 4 : それではルスワは不幸をもたらす一種の原因であると考えてもいいですね ?

A 4 : そのとおり。不幸の原因であるといっている (①)。不幸の出来事によって発見されないうちは、その存在にきづかれないものだともいえる (②)。子供たちが病で死にそうになってはじめて遡って思い返してみると、母親が服を脱ぎ捨てた事件や、またそれに対して「燃やす」⁽⁵⁾ 儀礼を行っていなかったことに思い当たったのだ (③)。

Q 5 : どうすれば、ルスワは解決できるのですか？ 祓うことはできるのでしょうか？

A 5 : そのためには、クランの構成員みんなが集まってルスワを祓うチョウォ・ルスワ (*chowo luswa*) 儀礼 (別名ワンゴ・ルスワ (*wango luswa*)) を行わなければならない (④)。まず、沼地に乾いた木とバナナの葉で小さな小屋をあつらえ (⑤)、棘だらけの塀をとりつける。その塀をオクド・オンゴノ (*okudho omgono*) という (⑥)。そのなかに罪人を二人とも裸にして押し込み (⑦)、火

を付ける (⑧)。オケウオが火を放ち、裸のまま異なった方角へ逃げる (⑨) のを皆で口々に罵り、不幸をもたらすその連中を追い祓うためにはやしたてながら追うのだ (⑩)。その際に男のほうは3つ、女のほうは4つ、ひっぱたかれねばならないきまりである (⑪)。羊が供犠され、処理されている間、長老たちはその間、コンゴ(シコクビエから醸造した酒。パドラでは儀礼的に重視される)を飲みながら悠々と待っている (⑫)。ある程度の場所まで逃げると、衣服を持ったクランの仲間が待っていてくれて (⑬)、ルスワが浄められた二人は服を着て屋敷にもどることができるのが普通だ (⑭)。許されて結婚した例もあると聞いている (⑮)。

Q6: それ以外にも儀礼のようなものを行うのではないのですか? 準備するものはありますか?

A6: 今までに言っていないものとしては、供犠するための子羊あるいは羊 (*rombo*) と鶏が必要だ。問題を起こした男の側の親たちが準備することになっている (⑯)。調理に使ったことがない壺を買うなどして手に入れて用いる (⑰)。使ったらそれをわざと壊して、破片や残骸を火にくべて燃やし、それを森のなかに不吉な物と一緒に捨ててくる (⑱)。

ルスワの浄めに用いる薬は、薬草師が昼日中に真っ裸で引き抜いた薬草で調合される (⑲)。薬を調合するのに用いる臼とロク (*lok*) (杵) が、施術師により用意される (⑳)。また、その他、儀礼に必要とされたものはすべて施術師によって適切に指示され、整えられる (㉑)。施術師は、薬を調合しながら祖先の名前を唱え (㉒)、そのもたらす祝福の力がその薬に込められるように願う (㉓)。施術師には、薬の調合の謝礼として、ケンバ (*kemba*) (謝金) と鶏が与えられる (㉔)。

Q7: ルスワで命を落とすことはありますか?

A7: 万が一、浄めの儀礼をしなかったら、死んでしまうはずだ (㉕)。そいつらはひどい精神異常に悩まされ、そうこうしているうちに女性に乱暴をしたり、他人を傷つけたり殺害したり、あるいはそうした犠牲者になるようなトラブルに巻き込まれるだろう。ことによると AIDS になるかもしれない (㉖)。…

【解説】

不幸をもたらすルスワ (①) は、逆に、不幸の経験に直面してみて、遡及的に見いだされないうちは、気付かれないものだ (②)、との見識を示している。このことは、災いという「経験」を起点にして、その原因を探る、解釈の網の目が開かれていくさまを言い当てているといえよう。「子供たちが死にそうになってはじめて」、「母親が普及を脱ぎ捨てた事件」やそれに対する対処を行っていなかったことに「遡って思い返して」気づいたのだ (③)。

ルスワを放置すると、精神異常、女性を含む他人への暴行、あるいはそうした暴行の犠牲となる、あるいは AIDS にかかるなどして (②⑥)、死に至るといふ (②⑤)。

ルスワを祓う儀礼の過程の詳細については、実際に「燃やされた」経験者だけあって詳しい。ルスワを祓うには、「チョウォ・ルスワ」儀礼を行わなければならない (④)。まず、問題を起こした人間の親が、「羊」と「鶏」(とおそらくはコンゴ) を用意する (①⑥)。「羊」(とコンゴ) は、儀礼に参加したクランの人々で共食され、鶏は、薬を調合するジャヤーシのためのものである。ジャヤーシはヤーシ・ルスワをつくるために、真っ昼間に全裸で引き抜いた草を (①⑨)、ジャヤーシの準備した臼と杵で調合してつくられる (②⑩)。他の準備や機材についてもジャヤーシの指示に従う (②⑪)。(供犠した羊の調理やコンゴに用いる) 壺も料理に使ったことがないものを求めないといけない (①⑦)。

チョウォ・ルスワはクランの構成員が集まって、以下の手順で行われる。1. 沼地にバナナの葉と「乾いた」木材 (後で燃やすのだから湿ってはいは差し障りがある) で小さな小屋を建てる (⑤)。棘のついた植物で堀、オクド・オンゴノをあつらえる (⑥)。2. その小屋にルスワを犯した二人を裸にして押し込める (おそらくはここで薬草で体を浄められている)。(⑦) 3. オケウォが小屋に火を放ち (⑧)、ルスワを犯した者は裸のまま異なった方角に逃げる (⑨)。4. 逃げる二人をクランの人間は囃し立てながら追う (⑩)。5. この間、男性は3回、女性は4回ひっぱたかれる (①①)。6. 羊が供犠され、コンゴとともに出席者により共食される。この例では、長老は、儀礼の最中からコンゴを嗜んでいたようだ (①②)。

決められた場所で仲間が服を持って待っていてくれて (①③)、その後は服を着て帰宅できる (①④)。なかには関係を許されて結婚することになった例もあるとい

う (15)。

儀礼の後、その儀礼に用いられたもの一切を森に捨てる。たとえば、壺は打ち割ってから焼いて捨てる。

クラン全体が総出で行う非常に大がかりな儀礼であったことがうかがわれる。

6 薬とキリスト教

Q8：ルスワの問題を宗教によって解決することはできますか？

A8：すでに述べたように、儀礼で「燃やし」て、薬を振りかけるより他に不幸から逃れる方法はないのだよ⁽⁶⁾ (1)。ルスワのための薬、イエン (*yien*) と、ティポ (死霊) に対処するためのイエンは、手に入れる方法が全く同じである (2)。まず、被害に遭っている当事者がありかを見つけ出し、施術師が裸になって掘り出しに行く方法だ (3)。手に入れた薬は、屋敷に続くすべての道筋に設置されて (4)、招かれざる厄介者だった死霊が屋敷から出て行って、その行き場を探すように仕向けるのだ (5)。

かつてオクム・アウイノ (*Okumu Awino*)⁽⁷⁾ という男がいて、その息子の妻と喧嘩になった。最中に、アウイノが杖 (性器の婉曲表現) をとりだして、義理の娘に当たる息子の妻に接触してしまった (6)。これはルスワだ。息子は結婚生活を継続したかったので、ヤーシ・ルスワ (*yath lusuwa*) (ルスワの薬) を探しまわった (7)。その薬で妻に水浴びをさせたら (8) 妻は助かったようだが (9)、その日のうちにオクムは急死した (10)。薬を使って解呪しようとしたことを、オクムの息子は後悔することになった (11)。そんなことはしないほうがよかったのだ。だから、ルスワを祓ってしまう薬があるとは、考えないほうが良いということだ (12)。

また、あるとき、洗礼を受けたムロコレ (*saved* の意。聖職者) が自分の義理の母を招待し、屋敷を訪れた義母にあいさつする前にまず義母をハグしたことがある (13)。それを見ていた人々は驚き、噂はたちまち広がった。クランの間は、彼らは、羊を用意しなければならない。(ルスワだから)「燃やさなければならない」と口々に言った (14)。しかし、そのことについて別の教会関係者

は、(キリスト教の) 信仰があるから、ルスワは関係ない、と言いたてた (15)。この場合には、クランの仲間がこだわったのは、その場に居合わせたけれどもがとばっちり不幸が訪れるのではないかとおびえていたからである (16)。…

【解説】

ルスワを祓うときに用いるイエン (薬) と、ティポ (死霊。とくにパドラでは殺害された者の死霊をいう) を祓うときに用いるイエンは作成方法が全く同じなのだという (1)。ともに、ルスワやティポの被害に苦しむ「当事者」がありかを探し出した草を、「ジャヤーシ」が昼間素っ裸になって掘り出しに行くやり方である (3)。その薬は、ティポに対して用いられるときには屋敷に続くすべての通路に配置されるというが (4)、「死霊」が「出て行くように仕向ける」(5) とあるので、これは、ティポの場合の処方であろう。ルスワでも同じように屋敷にも施術を行うのかはこのテキストからは判断できない。

続くオクムの事例はこの地域では非常に有名な事例である。息子の妻との喧嘩の最中、性器が誤って息子の妻に接触してしまう (6)。息子は、懸命にジャヤーシを探し (7)、何とか入手してまず妻に処方したようだ (8)。妻は助かったが (9)、オクムは急死した (10)。テキストでは、息子は父親の死はヤーシ・ルスワによるもので、それを後悔しているようだ (12) が、ヤーシ・ルスワを両者に処方しなかったのはなぜか (できなかったのか)、あるいは両者に処方していたらどうなっていたと推定されるのかなどは、よくわからない。

「宗教」(この場合にはキリスト教) で祓えるのかという、Q 8 の質問を受けてであろう、最後に、あるムロコレのエピソードが紹介された。自分の妻の母親を自分の屋敷に招待し、挨拶する前にまずハグしたというのだ (13)。この場合の挨拶は、忌避関係にあるものが行うべきものであるが、それを簡略化したうえに接触した、というので、ルスワの「災い」が飛び火するのをおそれたクランの面々は (16) (という話者の解釈も、広範囲に被害を及ぼすというよりは当事者が限定的に被害を被るはずのルスワの性格を考えると再考する余地はあるが) 「ルスワだ」「羊が必要だ」「燃やさなければならぬ」という人が多かった (14)。Hayley [1947: 94] は、近年の不真面目さのひとつとしてカヨ・チャゴ儀礼開催の際に分

け前としてもらえる肉ほしさにその契機となる子供の病気を喜ぶ親族のあさましさにについて記述している。実際、儀礼の開催は主催者側には膨大な出費があり、分け前にあずかる儀礼関係者からすれば、かなり「おいしい」話でもある。教会関係者は、キリスト教の信仰があるから「ルスワは関係ない」と主張したという(⑮)。このあたりの、キリスト教と「災因」との兼ね合いは、かなり個人によっても異なってくるので、その問題は稿を改めて検討することにしたい。

7 信念の呪縛⁽⁸⁾

<テキスト2>

…しかし、ルスワ、「呪詛」、レック (*lek*) (夢) そしてリフオリ (*lifjuol*) (不幸)。これらは、全部同じ特徴を持っている概念であると言っていい(①)。つまりは、これらのことを信じるならば(②)、その呪文は効力を発揮するし、あらゆる意味であなたを縛るものだということだ(③)。なかでももっとも大きな縛りがルスワだ(④)。ここパドラでは、息子の嫁、つまり義理の娘はあなたにとってふたつの家族に属する。セックスの対象にしてはならない(⑤)。しかし、アンコレには、結婚の前に婿の父親が嫁とセックスする風習があると聞く(⑥)。パドラではありえないことだ。また、アンコレでは、親戚と結婚してはならない決まりはないと聞いている。私たちの伝統とはその点大きく異なっている。しかし、アンコレにはルスワはないようだ(⑦)。義理の父親と娘が長らく一緒にいるということは、われわれの社会ではありえない(⑧)。うっかりすると娘に性的にたぶらかされていて、ルスワで身を滅ぼすのでは、と考えてしまう(⑨)。しかし、こういった考え方は、われわれが自分たちの信念をもって特定の問題を処理しているにすぎない。

もうひとつ私自身の体験を話そう。私の息子の屋敷を私は別に避けておらず、しばしばそこを訪れている(⑩)。そこで、あってはならないことだが、姻族である私がそこにいる女の子と性的関係を持とうとしたりすると、私にとっては孫に当たる女の子は、まともな頭を持っていれば、当然インセストにあた

るから、それを拒む(⑪)。そんな事件が起こったら、あっという間に噂になってしまう。それを考えてみるといい(⑫)。それは、誰しものが姻族との関係を大切なものとみなさない、ひどい態度だと考えるだろう(⑬)。聖書にも、特定の関係の者と性交渉を持つてはならないと書いてある(⑭)。また、そういった関係の相手に自分の性器を見せたり、そういう関係の異性の性器を見たりしてはならないのだ。

もしも、親戚であるということを知らずに結婚してしまったとする。その場合には、生まれるのは異常児・畸形児だろうし、すぐに死んでしまうだろう(⑮)。

しかし噂としては、様々なケースを耳にする。たとえば、自分のオバと性関係を持って結婚同然の暮らしをし、あまつさえ子までなした男がいた(⑯)。そのときに、われわれは無理にでも「燃やす」儀礼を行わなければならない(⑰)。その子供がどうなったのかは、私にはわからない(⑱)。…

【解説】

このテキストは、〈テキスト1〉とは、話者が異なるので、ルスワについての立ち位置もかなり差異が認められる。

信念のありようについての哲学的ともいえる解釈が提示される。ルスワも、「呪詛」も、夢見も、不幸も、すべて同様の性格を持っているという(①)。つまり、信じるなら(②)、呪文の効果含めその後の結果についての解釈を規定する。その意味では、人間は、その社会的な問題認識、対処についての出発点で、こうした信念に大いに縛られている(③)。こうした縛りのなかでも、ルスワは、最大のものである(④)。

しかし、それが人類普遍のものではなく、パドラ限定のものであることは、彼らも気づいている。

テキストでとりあげられる代表的な例としては、パドラでは、息子の嫁は、セックスの対象にしてはならないことになっている(⑤)。一説によれば、異常児・畸形児が生まれるともいうが(⑮)、それ以外に列挙される根拠は姻族への敬意(⑬)や聖書の教えなど(⑭)、根拠を説く部分の歯切れはあまりよくない。

それは、実際にオバと性関係を持って子供までいるケースも知っているからで

あろう(⑩)。そのケースでは、「ルスワを祓う」儀礼をなかば強制的に行ったようだ(⑪)。「最終的にどうなったかわからない」(⑫)とするように、実は、畸形など生まれないかもしれない、と考えている節もある。

また、異民族の例などとも比較して、ルスワがパドラのローカル・ルールであることは、明確に認識しているようである。テキストでは、アンコレでは、結婚の前に婿の父親が嫁とセックスする(⑬)と伝聞しているようだが、これは不正確である。夫になる花婿がオバと性行為をしてその性的能力を試されるという伝承はあったようだが、事実性は乏しい。オバが花婿の性的能力を試験する慣習はあったという(アンコレでは、花嫁は処女でなければならない)。それでもアンコレにはルスワはないらしい(⑭)という事実と比較して、父親と息子の嫁が長らく時間と空間を共有することはありえない(⑮)という自分たちの社会の規範を再確認する。この話者は、息子の嫁に対し(顕在的ではないにせよ)性的な欲望とはいわないが可能性は認めているようで、息子の嫁に性的にたぶらかされて身を滅ぼすことを恐れている(⑯)。自分に引きつけて考えて適切な事例を出そうとするが、自分自身は息子の屋敷を避けてはいない(⑰)。もし自分が義理の娘に迫っても当然拒まれるし(逆に迫られたらどうするのだろうか)(⑱)、その噂が広がることを気にしている(⑲)。非常に現実的にタブーを侵犯してしまう可能性を認めているようにも思われる。

Ⅲ まとめ

見てきたようにルスワはニョウォモ・ワトという、インセスト・タブーを侵犯して親族と性交渉をもったことによって発生するものと、近親者の裸形や性器などを目撃してしまうという事故も含めた「不適切」な行動から発生するものがある。また、父母やオジオバのベッドで寝たり、セックスしたり、ということもルスワとみなされる。

とくに第二のものは、「呪詛」の代替物として意図的に比較的容易に行うことができるので、しばしば親によって利用されるとされている⁽⁹⁾。とくにテキストでは意識的に語られていないようだが、一般にパドラで言われている「実の親子間では「呪詛」は効果がない」[梅屋 2017b: 87]という原則に則って考えるとすれ

ば、オジやオバにはある行使できる「力」が父や母にはないことになり、その代替として用いられるのである。

実際に、私の調査資料のうちで、分類上「呪詛」の事例のなかに含めたもののなかにも、クランのルール、そして忌避関係の姻族（とくに忌避姻族オリ or）に対する不敬を問題にするものがあり、＜クランの「呪詛」＞あるいは、＜ニャパドラの「呪詛」＞という社会が主体となった「呪詛」というようなとらえ方ができそうなものも散見された。

ルスワを祓うのに確実にとされているのは、「燃やす」儀礼を行うことだが、これは大がかりでもあり、公になってしまうので、「イエン」（薬）を探す者は後をたたない。薬は存在するが、それを用いれば、確実に死人が出る、という。この「イエン」は、ティポを祓おうとするときに用いるものと同じだといわれている。当事者がありかを見つけ、ジャヤーシが真っ昼間に裸になって取りに行く方法である。この薬を浴びると、当事者は助かるが、必ず死人が出るとされる。

一方、「ルスワを燃やす」（ワング・ルスワ／チョウォ・ルスワ）儀礼は、沼地にバナナの葉と「乾いた」木材で建てた小さな小屋にルスワを犯した二人を裸にして押し込めることからはじめられる。薬草で体を浄めたころ、小屋には火が放たれる。ルスワを犯した者は裸のまま異なった方角に向かい、男性は3回、女性は4回ひっぱたかれながら、決められた場所まで逃げる。二人をクランの間人は囃し立て、追い立てられ、追われて決められた場所まで逃げる。羊を供犠され、コンゴとともに出席者により共食される。クランのメンバーほとんどが関わる公式的な儀式である。

ルスワになった者の症状は、オバとのニョウォモ・ワトを犯した場合に年増女を追いかけるというものがあるが、一般的には、「呪詛」と同じであるといわれる。「AIDS患者のようだ」ともいわれる。すなわち、何もできなくなり、思考能力がなくなる。身体的に弱々しくなって性的能力も生殖能力もなくなる。髪が抜け落ち、変色する。皮膚がひび割れ、はがれ落ち、色が黄色くなり、斑点も出て、最終的には発狂するという。発狂の典型は夜外に出て走りまわることだから、ジャジュウォキのようになってしまってもいるわけである。

このように、こういった症状のなかには「ルスワ」に特有のものは何ひとつな

いといってよい。すべての症状が「呪詛」「ジャジュウォキ」「ティポ」それぞれの説明が当てはめられてもおかしくないものなのである。ティポの薬とルスワを祓う薬の作り方が同じでも、不思議はないのかもしれない。

くどいようだが、もう一度ティポに憑かれた際の特徴として何が語られていたのかを確認しよう。

「ティポの攻撃を受けると、当人は肌の色が黄色くなり、やせ細って弱り、体の一部が腐敗し、口が利けなくなる。症状は AIDS とほとんど同じである。もうひとつの特徴は、ティポに標的とされた人間の孫の世代からクランの人間が病に冒され、死んでゆく。死ぬのは、犠牲者となったティポの持ち主と同じ性であるといわれる。広義には不運もティポのせいとみなされることがある。」

[梅屋 2017a: 52]

仮にここに AIDS 患者がいたとして、それにはどんな説明があたえられるのであろうか。

註

- (1) 「テキスト」は、ここでは、言語の種類を問わず、逐語的に文字で記録されたものをそう呼ぶと理解されたい。「テキスト」については、梅屋 [2009] などでも多少詳しく議論している。
- (2) なおマイケル・オロカ=オボは、2017年8月末より日本学術振興会科学研究費補助金による研究計画の研究協力者として来日し、9月2日には梅屋と共同で *Witchcraft and Curse in Padhola* (「パドラにおけるウィッチクラフトと呪詛—決して保護されることのない伝統的無形文化」) と題する講演を行った [Oloka-Obbo & Umeya 2017]。
- (3) 以下のようなテキストには、同様に、ルスワの恐ろしさについての認識が語られている。話者はルスワ以外の「ニャパドラ」(アドラ流の、アドラ独自の、の意)の他の概念(たとえば、ティポ (*tipo*) (死霊) やジャジュウォキ (*jajwok*) (ウィッチ、ナイトダンサー、他人に毒を盛る者)、あるいはジャミギンバ (*jamigimba*) (降雨師) など)は否定したが、「ルスワ」のみは信じる、という。

「たとえばの話だが、少女とその兄弟(従兄を含む)が性交渉に及んだりする。ニョウォモ・ワト (*nywomo wat*) (インセスト)だ。これがルスワ (*luswa*) をもたらす。これは、究極の厄災である。そういったことは極秘で行われるのが普通だが、少女が妊娠してしまって明らかになることもある。子供が生まれても死ぬだけだ。あるいは、その関係をずっと続けたとしても子供は絶対に生まれぬ。少年がオバと関係を持つのは性に対する関心があるだけだ。浄めの儀礼(ワンゴ・ルスワ (*wango luswa*))をしない限り、二人とも

死んでしまうだろう。少年が知らずにオバと関係を持ってしまった場合、あるいはレイブなど特殊な事情で関係を持った時も関係した二人はワング・ルスワをしなければ死んでしまうだろう。もっとも、レイブなどの場合、性関係を持つことにこの場合にはオバの側は同意していないので、影響はないとも言われている。」

- (4) 親族関係を慣例に沿って簡略記号で記載すれば、M、MD、D、SD、Z、MM、DD、WM、F、FS、S、FF、MF、SS、DS、ZS、FBS、MMS、B、HF、MH、WD、FZ、MZ、BZ、ZD、FBD、MZD、SW、HS、FB、BS、DH、クランのメンバー、FFSである。忌避の対象となる関係の親族は、クランのメンバー: ジョ・ノノ (*jo nono*) は当然として、まとめると以下の16カテゴリーとなる。1. 「母」ママ (*mama*): M、MZ、2. 「娘」ニヤル (*nyar*): MD、D、WD、3. 「孫」ニヤクワル (*nyakwar*): SD、DD、SS、DS、4. 「姉妹」ニヤメリ (*nyamer*): Z、BZ、FBD、MZD、5. 「祖母」アダダ (*adhadha*): MM、6. 「忌避姻族」(*or*): WM、DH、7. 「父」ババ (*baba*): F、MH、8. 「父の子」ワヤ (*waya*): FS、FZ、9. 「息子」ウオド (*wod*): S、HS、BS、10. 「祖父」クワル (*kwar*): FF、MF、HF、11. 「オイ (オケウオ)」(*okewo*): ZS、ZD、12. 「兄弟」オメリ (*omer*): FBS、B、13. 「母の母の息子」ニヤメリ (*nyamer*): MMS、14. 「息子の嫁」(*chiwod*): SW、15. 「父方オジ」オミン・ババ (*omin baba*): FB、16. 「父の父の子」ニヤクワリ・ニヤクワリ (*nyakwari nyakwar*): FFS。
- (5) かつてはタブー侵犯のみせしめとして本当に二人を焼き殺していたはずだと主張するアドラ人もいた。ただし、そのアドラ人にかかると、ルスワも含めすべてのアドラの独自の観念は迷信だという。しかし、「迷信だ、自分は信じていない」といいつつ語るディティールの細かさは、自分は「邪術」を「やったことがない」といいながらその手法を細部に至るまで説明できる人間がいるように、非常に興味深い現象である。
- (6) 別のインタビューでは、「仮にインセストを犯し、そして「浄めの儀礼」をおこなわなかったら、どんなに手を尽くしてもおそらくその男女は死んでしまうだろう。ジャシエシの施術だけではだめだ。」という点については、多くの人が賛同したが、キリスト教については、「教会の懺悔には効き目があるという人と、そうではないという人」といって、意見が分かれている。」という。梅屋 [2016b] で紹介した聖霊派教会の人々の見解と重ね合わせて考える必要がある。
- (7) 本文では、ヤーシ・ルスワがもたらす死についての事例となっているが、この同じ事件については、別の話者から別のテキストを得ている。ここでは、結果は同じだが、ルスワを祓う薬を用いたことが問題視されている。おそらく、「燃やす」儀礼を行うべきだったことだろう。
- 「オクムという男の例を話してやろう。オクムが妻と喧嘩しているところへちょうどあられたオクムの父親が、間に入って二人をわけたのだ。オクムの妻は口を極めて義理の父親を罵るので、義理の父はついに義理の娘に手をあげてしまった。相談に来たときには、二人の子供たちは瀕死の状態であったが、オクムはキリスト教徒だったので、儀礼を受けるわけにはいかなかった。キリスト教はルスワも懺悔によってゆるされるとしている。オクムを除くほかの人々は儀礼を受け、薬液を浴びて浄められた。儀礼も受けず、薬液も浴びなかったオクムはそれからほんの1時間も経たないうちに死んでしまった。」
- (8) 言うまでもないことだが、この節の表題は、浜本 [2014] による。
- (9) Oloka-Obbo & Umeya [2017] でも、curse の教育的、しつけにもつ社会的機能は強調された。

参考文献

- Crazzolaro, Joseph Pasquale
1951 *The Lwoo Part II, Lwoo Traditions*. Verona: Museum Combonianum.
- 浜本 満
2014 『信念の呪縛——ケニア海岸地方ドゥルマ社会における妖術の民族誌』九州大学出版会。
- Hayley, T. T. S.
1947 *The Anatomy of Lango Religion and Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oloka-Obbo, Michael
2016 Differences of the Methodologies Findings: An Overview. In Shiino, W., Shiraishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. pp.95-99.
- Oloka-Obbo, Michael & Kiyoshi Umeya
2017 Witchcraft and Curse in Padhola. 現代民俗学会第38回研究会 東アフリカ・ウガンダのフォークロアと文化遺産——文化遺産として承認されるフォークロア／承認されないフォークロア、現代民俗学会（神戸人類学研究会・神戸大学国際文化学研究推進センター共催）、神戸大学鶴甲第一キャンパス A403、2017年9月3日。
- Owor, Maureen
2012 Creating an Independent Traditional Court: A Study of Jopadhola Clan Courts in Uganda. *Journal of African Law* 56: 215-242.
- Owora, Paul
2016 Ugandan Sociologists Met a Japanese Anthropologist: Experience of the Decade. In Shiino, W., Shiraishi, S. & Tom Ondicho (eds.) *Re-Finding African Local Assets and City Environments: Governance, Research and Reflexivity*. Tokyo& Nairobi: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies & JSPS Nairobi Research Station. pp.101-103.
- Tieng Adhola (Adhola Union)
n. d. The Constitution of Tieng Adhola. mimeo.
- 梅屋 潔
2002 「民族誌家と現地協力者——ウガンダ東部パドラにおける Crazzolaro とオフンビ親子の場合」『哲学』107集、慶應義塾大学三田哲学会：233-260。
2007 「酒に憑かれた男たち——ウガンダ・パドラにおける『問題飲酒』と妖術の民族誌」『人間情報学研究』第12巻：17-40。
2008 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』——*iwogi, tipo, ayira, lam*の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻：131-59。
2009 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』——現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第14巻：31-42。
2010 「酒に憑かれた男たち——ウガンダ・アドラ民族における酒と妖術の民族誌」『人＝間の人類学—内的な関心の発展と誤読』中野麻衣子・深田淳太郎編著、15-34、はる書房。
2011 「ある遺品整理の顛末——ウガンダ東部トロロ県 A・C・K・オボス＝オフンビの場合」『国立歴史民俗博物館研究報告』169集：209-240。
2012 「アフリカのある村における死霊の観念と施術師、そして呪い歌」『地域構想学研究教育

報告』第2号：70-80。

- 2014a 「ウガンダ東部アドラ民族における *okewo* の儀礼的特権——現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第19号：9-28。
- 2014b ふたりの調査助手との饗宴 (コンヴィヴィアリティ) ——ウガンダ・アドラ民族の世界観を探る」『フィールドに入る (FENICS 百万人のフィールドワーカーシリーズ、第1巻)』(椎野若菜・白石壮一郎編) 158-181、古今書院。
- 2015 「葬送儀礼についての語り——ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウオの儀礼的特権」『森羅万象のささやき—民俗宗教研究の諸相』(鈴木正崇編) 375-396、風響社。
- 2016a 「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌——死霊と憑依、毒そして呪詛の観念 (I)」(協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウオラ)『国際文化学研究』第47号：25-49。
- 2016b 「「伝統」を逆照射する——ウガンダ東部パドラにおける聖霊派キリスト教会の指導者たち」(協力：ポール・オウオラとマイケル・オロカ=オボ)『近代』第115巻：1-43。
- 2017a 「ウガンダ東部パドラにおけるティポ *tipo* の観念」『人間情報学研究』第22号：29-59。
- 2017b 「ウガンダ東部パドラにおける「災因論」の民族誌——死霊と憑依、毒そして呪詛の観念 (II)」(協力：マイケル・オロカ=オボとポール・オウオラ)『国際文化学研究』第48号：77-109。
- 2017c 「あるポストコロニアル・エリートの死——ウガンダ東部パドラにおける埋葬儀礼の記録」(協力：ポール・オウオラとマイケル・オロカ=オボ)『近代』第116巻：1-74。

追記

本研究の成立に関しては笹川科学研究助成金 (研究番号 13-054) に感謝する。また主な調査と資料の整理は以下の科研費によっている。科研費 18720245、24520912、23242055、15K03042、16H05664、16K04126。記して感謝する。

Luswa:

The Notion of the ‘Incest Taboo’ among the Jopadhola of Eastern Uganda

Kiyoshi UMEYA

In Association with Michael OLOKA-OBBO and Paul OWORA

This paper aims to examine the concept of *luswa* among the Jopadhola people living in eastern Uganda based on ethnographic data, and narratives of native people recorded and transcribed verbatim as a form of a certain volume of the ‘text’; these data were collected in fieldwork among them between 1997 and 2017.

Luswa is said to be caused by violating the incest taboo and having sex with relatives; it arises from ‘inappropriate’ behaviours, for example witnessing close relatives’ nakedness and genitalia, including doing so by accident. Sleeping in the beds of parents or uncles or aunts, and having sex, is also regarded as *luswa*. The symptoms of those who are thought to be *luswa* are generally said to be ‘the same as the victim of the curse’. It is said to be ‘the same as the HIV patient’, and includes being physically weak, and being impotent without reproductive ability. The hair falls out and discolours. The skin cracks, peels off, turns yellow, spots on the skin appear, and eventually the person goes mad.

Luswa, which can be caused intentionally, is often used by parents as it can deliberately be undertaken relatively easily as a substitute for the ‘curse’ that is believed to be ineffective with actual children.

What is sure to resolve the effects of *luswa* is to carry out a ‘burn’ ceremony. It is an official ceremony involving most of the members of the clan. Some people advocate the existence of drugs, but they are unsure whether these work.

This paper asserts that the concepts that play the role of causes of misfortune in the aetiology of the Jopadhola are intertwined and closely related to each other. As it is apparently clear, from examining the ‘text’, that the symptoms of *luswa*

are not specific to *luswa*, it is not surprising that explanations for the symptoms of *luswa* can be applied to the conditions described by diverse concepts held by the people, such as 'curse', '*jajwok*', '*tipo*,' and so on.

Keywords: incest taboo, Jopadhola, Uganda, cosmology, curse, witchcraft

キーワード：インセスト・タブー、アドラ（民族）、ウガンダ、コスモロジー、呪
詛、ウィッチクラフト